

## 日本染色体遺伝子検査学会：学会活動を振り返って

北海道大学名誉教授  
北海道大学病院検査・輸血部  
松野 一彦

2015年（平成27年）初頭に際して、一言ご挨拶を申し上げます。私は2000年から本学会に入会させていただき、昨年までの15年間で14回の学術集會に参加して勉強させていただきました。そして2006年から昨年まで理事を務め、2010年から2012年の短い期間でしたが理事長のご指名を受けました。また2001年（第19回）と2010年（第28回）の札幌での2回の学術集會の大会長を務めるという荣誉に浴する機会もいただきました。この場をお借りして会員の皆様のご支援に御礼申し上げます。昨年12月付けで奥山虎之理事長から本学会の顧問の委嘱をいただきましたので、もうしばらく本学会の活動を応援したいと思っています。

さて、10年近く理事として活動しながら、私としては忸怩（じくじ）たる思いを拭えない気持ちでございました。それは「検査血液学」を中心に臨床検査医学を専門として研究・教育を進めて来ましたが、どのくらい本気で「染色体・遺伝子検査」に取り組んでいたかということに自信がなかったことによります。振り返ってみますと、私が最初に染色体検査に触れたのは、医師になって2年目の1973年です。北大病院の第3内科で研修医として、消化器と血液内科学を学びましたが、1年先輩で当時、北大に設置されていた染色体研究所で染色体分析を学んで来た先生がいて、その先生の下でPh染色体（当時Ph1染色体）の検査を

習いました。カルノア固定液の作成やメタフェーズの展開から写真の撮影などの基礎を学んだ後、G-banding、Q-bandingに取りかかった頃、内科全般を学ぶために東京の聖路加国際病院の医員となって移動したため、染色体分析を極める前に終了となってしまいました。この40年以上前のトラウマがまだ残っているものと思われます。

その後は血液専門医、臨床検査専門医となり、血液形態学、凝固学とともに染色体検査も遺伝子検査も血液疾患診断のための検査として、結果を利用する側にまわってしまいました。40年後の現在は、北大病院検査・輸血部の臨床検査管理医師として骨髓検査を読んで報告書を作成したり、日常の凝固検査結果の管理などを行っています。骨髓検査でいえば、毎年800~900枚の骨髓標本を読んで形態学的診断を付けながら、ともに提出された骨髓血を用いた染色体検査、遺伝子検査、フローサイトメトリーによる表面マーカー検査などの結果を眺めています。

私が染色体分析を習った当時は、白血病関連ではPh染色体のみが知られており、t(8;21)転座などがようやく発見されてきた頃でしたが、現在北大病院検査・輸血部では造血器悪性疾患の染色体検査（G-banding）のほか、Major BCR-ABL、minor BCR-ABL、AML1-MTG8、PML-RARA、CBF $\beta$ -MYH11 キメラ遺

伝子 mRNA の検出、Major BCR-ABL、  
CBF $\beta$ -MYH11、AML1-MTG8 キメラ  
mRNA 定量測定、STR キメリズム解析、  
異性間 BMT FISH 解析のほか、MLL、  
TEL/AML1、IGH/BCL2、IGH/CCND1、  
13q14、14q32、8q24、IGH/FGFR3、  
BCL6、5q-など 17 種の FISH 検査、  
WT1mRNA 定量検査を院内の染色体・遺  
伝子検査室で測定しています。まさに隔世  
の感があります。特に寛解後の再発の予知  
には、これらの微小残存病変 (MRD) 検査  
の力は絶大で、MRD 検査と同時に行った骨

髄検査では白血病細胞の増加はまったく認  
められないのに MRD 弱陽性の症例で、1  
～2 週間後に形態学的にも白血病細胞の増  
加がみられるという経験を日常的にしてい  
ます。まあ、現在のところすべての症例で  
染色体・遺伝子異常が認められるわけでは  
ないので、形態学の重要性を信じて毎日  
顕微鏡に向かっています。

さらなる染色体・遺伝子検査の分野の進  
展と、日本染色体遺伝子検査学会の発展を  
祈っております。